

警備隊は、第一警備隊（第百十警備隊（六十八隊）及び地名を冠した警備隊（五十一隊）中国八、島嶼七、他三六）の計一一九隊。港湾警備隊（地名を冠す）二七隊、防備隊二八隊である。

占守島は千島列島最北端、カムチャツカ半島に接した島であり、アツツ島玉砕、キスカ島海軍守備隊は撤退したが、文字通りの日本北端の護りの地であった。北千島は、徳川時代、日本領とされていた樺太と条約により交換したもので、純然たる日本領土であった。

しかし、ソ連軍は終戦後の昭和二十年八月十八日、占守島に奇襲上陸した。日本軍占守所在部隊は、来攻のソ連軍を反撃し、ソ連艦船に多大の損害を与えた。しかし、日本軍は命により十六時戦闘を中止した。

八月十八日、日本軍は北千島の戦闘行動を停止した。また、参謀総長は、第五方面軍（北方軍）に局地停戦交渉と武器引き渡し等を指示した。

その後、ソ連軍は樺太に上陸し、我が軍使をソ連歩哨が荒貝付近で射殺するという事件が起きている。

## 吾れ戦艦「武蔵」に乗艦せり

埼玉県 笠原 安雄

徴兵検査前の家族構成等について

私の家族は両親と兄妹七人の九人家族でした。上から男四人、女二人、第一人、皆二歳違いでした。家業は農林業で山林が五十町歩、田畑一町五反歩、世間的にみれば裕福の部に入りますが、昭和初期の不況のため裕福とは程遠いものでした。

小学校から県立粕壁中学（当時県下中学は七校）に入りました。勉強は好きでしたが経済的事情で中退の止むなきにいたり、今でも当時を偲び後悔しています。海軍志願にも挑戦しましたが体格検査で不合格でした。そして岡山市の秩父織物卸小売店の店員となりました。当時青年学校というのがあり、軍事教練が主で仕事が終わるといつも駆け足で学校に通いました。主に一般産業の子弟は軍事産業の会社に徴用されまし

た。岡山では、三井造船や呉の海軍工廠等に徴用されました。

昭和十六年五月、本籍地の埼玉県秩父郡長若村に帰り、秩父郡秩父町の小学校で嚴重な徴兵検査があり、学科試験もかなり難しいものが出題されていました。当時村の兵事主任は権威があり、村長より威張っていました。同年の者は二十八人で、このうち甲種合格は八人で他は第一乙、第二乙、丙種となり、第一乙までが現役兵として入営させられました。私は身長一五八センチ体重七〇キロで徴兵官の前で甲種合格と報告しました。

私は旧制中学で少し学んだため学力試験がよくできましたので、一般普通兵科には採用されなれと思っていました。両親は、上の兄も出征してしまいましたので、御奉公するのが当然と思ひ、心配するよりかえって喜んでいました。

昭和十七年九月一日の入団でしたので、徴兵検査よりかなり期間がありました。織物屋の店員は嫌で嫌で、入団の日を待ちわびていました。そのうち十二月

八日の開戦、海軍はハワイ攻撃で大戦果を挙げましたので特にもてはやされました。長兄に召集令状が来ました。自分は岡山の店を引き揚げ、家業の農林業を手伝い、九月一日の入団を待ちました。

九月一日の入団入営は村で五人でした。私が代表して「滅死奉公・国家のため身を捧げるつもりで、二度とこの地に還ることはないでしょう」と挨拶しました。村の方や親戚の方々が、大勢山を越え、徒歩で駅まで送ってくださいました。

#### 入団してからの話

五十有余年も前のことで、苦勞も種々ありましたが、今思うと生きて帰ったのが不思議なようです。横須賀第二海兵団、海兵団の内務は教班と言つて一個分隊が二四〇人、一個班は二〇人、教班長は一等兵曹で、教練は艦砲射撃訓練、陸上歩兵戦、特に敵しかつたのがカッター訓練でした。海兵団の沖に猿島という小島があり、往復六キロメートルを短艇（ボート）を漕いで行くのですが、手の皮や尻の皮が赤く腫れて苦

勞しました。夜間も諸教育があり、あまり頭の良くない教班長は、吊り床訓練等に夏の暑い盛りの中で、三回もほどいたり縛ったりし直して、そのために埃が部屋中いっぱいになり、床に水をうって就寝する始末でした。これでも誰一人文句を言うものもなく服従しました。

十二月一日、第十五期丙種飛行予科練習生を志願しました。教班長は飛行機乗りは消耗品だから止めた方がいいと勧めるのですが、忠君愛国の精神が旺盛のため、第十五期丙種予科練を志願しました。丙種とは海軍に入った者から採用するもので、第十五期で丙種は終わりでした。新設されたばかりの兵舎である三重海軍航空隊で約一カ月適性検査を受け、一番最後の検査で不合格となりました。分隊で八人が行き、そのうち五人は不合格となりました。飛行機乗りは難しいものでした。第十五期丙種予科練生は七六%が戦死されました。航空隊の資料館にその資料が出ております。

#### 戦艦「武蔵」乗艦について

失意の中に海兵団に帰りましたが、間もなく世界最大と言われた「武蔵」乗艦を命ぜられ、陸路呉軍港に向かいました。岸壁に停泊している「武蔵」を見て驚き、まるで姫路城を思わせる威容に圧倒されました。最初の夜は三番甲板に就寝し、夜半便所に行ったのですが、自分の吊り床になかなか帰れず、三時間もうろうろして「総員起こし」までによく帰りつく有様で、「武蔵」は如何にも大きく複雑な居住区でした。

航海科見張員を命ぜられました。昭和十八年一月十一日乗艦、十八日には赤道直下、連合艦隊最前線基地（トラック島）に駆逐艦四隻の護衛のみで出撃しました。大きな波もひとまたぎで動揺することなく、一月二十二日トラック島に着きました。海の綺麗なことは驚くばかりで、深度により海の色が違って見えまして。日本海軍の連合艦隊が勢揃いして堂々たる威容を眺め、必ず勝ると意を強くしました。ミッドウェー決戦で失った「加賀」「赤城」「蒼龍」「飛龍」の四隻はなく、戦艦は「大和」「長門」、空母は「瑞鶴」「翔

鶴」「隼鷹」「飛鷹」等、巡洋艦は重巡・軽巡そして大型給油船等々で驚くばかりでした。

昭和十八年二月十一日紀元節の日、「大和」より連合艦隊司令長官山本大將が「武蔵」に移乗され、艦橋に大將旗が掲げられ旗艦となりました。朝夕の軍艦旗の掲揚・降納には、いつも先頭に出られる自分達は艦橋配置のため、長官には特に近くで接することができました。

この頃ソロモン海域での戦争が激しく、長官は最前線視察と兵員の激励のためトラック基地よりラバウルに飛び、さらにショートランドに向かう途中のブーゲンビル島上空で、待ち伏せしていた敵機P38戦闘機編隊により、海軍の一式陸攻座乗の長官・主計長・軍医が総員戦死されました。宇垣参謀長は別機のためブーゲンビル島で救助され無事でした。四月十八日は忘れ得ない日です。その頃まだ長官戦死の広報はなく、古賀峯一大將が乗艦されていました。我々兵員はそのような重大事件をよそに厳しい訓練に日々を過ごしていました。見張員は海面より三八メートル高い防空指揮

所で、二五センチ望遠鏡で四時間交代（二十四時間）で対空海面を見張ります。大型艦は防潜網といって舷測五メートルぐらいの所に網を張り魚雷攻撃に備えています。

当直以外の兵員は、連合艦隊の見張術の権威者と言われた静岡県韮山出身の足立寿作見張長の指揮の下、艦内居住区に暗幕を張り、日本海軍の艦型、米軍の艦型、日本の飛行機・零戦・艦攻・艦爆・中攻・さらに米軍の飛行機のP38グラマン等の型を全部覚えさせられました。特に難しいのが夜間の潜水艦発見訓練で、赤道直下の艦内暗室は蒸風呂（サウナ）のようなもので、全員禿一本の丸裸でした。自分は視力二・〇まで見えるようになりました。

山本長官の遺骨輸送、日本に帰る

山本長官の御遺骨輸送任務はトラック島を五月十七日出発、東京湾へ。この頃長官戦死の報は全国に報道されました。

五月二十二日、東京湾の木更津沖に投錨しました。

秘密を守るためとのことで外紋を塗装して横須賀に入りました。この時兵員は二泊三日の外泊が許可され（半舷上陸と言って乗組員の半数上陸）、私達も入団以來はじめて親元に帰りました。こんなに嬉しいことはないものです。家へ帰ってもどんな艦に乗務しているかなど絶対言ってはならぬと口止めされました。

六月二十四日、天皇陛下は高松宮軍令部高官を随えて行幸になり、十六貫の天皇旗が旗甲板に掲げられました。絹ずれの音が今も耳に残ります。その後間もなく呉港に向かい入渠しました。この時食中毒が発生し、ドック内では用便できぬため大騒ぎとなりました。その後桂島の艦隊基地に入りました。

戦艦「陸奥」が六月八日、対空射撃用三式弾の加熱から 폭발をし、甲種予科練等に多くの犠牲者が出ました。一カ月以上経っても死体が浮いてきて、それを島に持っていき火葬する様子が二五センチ双眼鏡で眺められ、海軍史上珍しい事件として伝えられています。私達が眺めた時点では、艦橋の一部は見えていました。七月三十日に再びトラック島に出撃しました。

トラック島で毎日訓練が続きましたが、同じ海軍に  
いるなら進級を早くするには学校に行くしかなく、死ぬことのみが奉公ではないと考えるようになり、練習生を志願して第八期館山海軍砲術学校測的術練習生に採用され、移動するため空母「沖鷹」に便乗しました。不運にも魚雷攻撃を受けて傾いた同型僚艦「大鷹」を曳航して横須賀に帰港という危険度が最も高い航海でした。

館山砲術学校は陸戦学校のため主力兵器は陸軍の歩兵砲、九二の重機、九七の軽機、擲弾筒も習得しました。主な任務は空中聴音、一五〇センチ探照灯、二メートル測巨機などで、その当時の米軍の電波兵器は優れており、これ等の兵器は無用に近いものだったと思われまます。腹が減っては戦はできぬと言いますが、食糧事情はまったく悪く、今の若い人たちにはわからないひもじい思いをしました。

昭和十九年一月十九日卒業、横須賀海兵団の補充分隊に入り、昭和十九年三月十五日「サントス丸」に便乗して三度目のトラック島に向かいました。トラック

島は二月十七、十八両日、米軍機動部隊の攻撃で大打撃をうけ、見る影もなく、航空機四百五十機全滅、船舶三十八隻沈没、「第三回南丸」等の大型船の石油タンク等が破壊されました。

時に連合艦隊は米機動部隊の来襲を察知してパラオへ、「武蔵」は横須賀に入港して無事でしたが、「那珂」という軽巡が勇戦して沈没しました。このような次第で、トラック島は一年前「武蔵」で入港した当時の面影はなく、毎晩の空襲で「サントス丸」にも至近弾が落ちてきました。このような状況の中、夜間戦闘機「月光」が敵機を追い回す様子が「サントス丸」から見受けられました。これでは上陸できる状態ではなく、引き返しサイパン島の補充部に上陸することになりました。

最初はサイパン島警備隊司令部本部の昼の食事の世話役で司令、海軍将官、准士官以上、海軍報道班員が一同に会して食事をする皿飯で、良質の食事でした。陸軍の将校が「俺達は飯盒で兵と一緒だが、海軍は少し緊張感が足りないのでは」と言っていました。

そのうち今度は第一補充部長森大佐の従兵を命ぜられました。大佐は立派な紳士でした。九七大艇で出撃しましたが帰ってこられませんでした。サイパンは当時中部太平洋艦隊司令部があり、南雲中将が長官で、小高いところにある実業学校を本部としていました。当時掌航海長が「武蔵」の見張長であった足立寿作氏であったため訪ねていったところ、ちょうど当直将校勤務中で部屋でバナナ等を御馳走になり、下級兵士の私でしたが丁重に扱ってくれました。

道路両側は武器弾薬の山で、それを山の洞穴に運んでいました。陸軍の兵士は天幕の野営であの小さな島に四万三千人もの将兵が防衛に当たっていました。

給油艦「高崎（四四七〇トン）」に五月二十六日乗艦を命ぜられました。サイパンとバリックパバン（ポルネオ石油基地）を往復するガソリン輸送艦で、竣工間もない新鋭給油艦でした。出港十日程で僚艦「足摺」と共に真昼間、ミンダナオ島とポルネオの間で米潜の攻撃を受け、前部に火災が発生しました。私は後部に逃げたため負傷することなく消火作業につと

めましたが一時間後沈没、海防艦に救助されました。

ボルネオ石油基地タラカンに入港、負傷者を上陸させ、重火傷者は病院のベッドで内地への思いを言いながら次から次へと死んでいきました。約三分の一ぐらいの人が死傷しました。海防艦でボルネオ・バリックパバン着。ここで機雷掃海作業、飛行場建設作業をしていました。旧オランダ兵舎で隣にはオランダ軍捕虜がおり、捕虜にはなりたくないと思いました。

サイパン作戦は「あ号作戦」といって主に航空決戦でした。日本海軍で一番働いた「翔鶴」が沈没。竣工間もない新鋭艦「大鳳」(二万九千トン)は魚雷一発でガス爆発を起こして沈没。それに「飛鷹」と大切な三隻の空母を失い、基地航空隊も帰るところなく海中に降りる始末でした。サイパン島は七月十八日玉碎し、これが日本の大きな転換期となりました。サイパン島には多くの知人、上司など全員玉碎し、自分だけ生き延びて申し訳ない気持ちとなりました。

そのうちバリックパバンより「萬栄丸」という油槽船に乗り、護衛艦の一隻も無いなかボルネオ、フィリ

ピンを経て夜は島陰に隠れ、船長の機転で雷撃を受けることなく二カ月かかって呉に入港しました。当時としては単船で「よく無事だった」と珍しがられました。

野菜の補給がなく、大方の兵員が脚気となり足がぶくぶくふくれました。日露戦争の時、森鷗外軍医官の食事処方の失敗により脚気で二万人もの戦死者を出したとか何かの本に出ていましたが、海軍は「麦飯」で脚気になる者がなかったとかいいます。「ビタミン」と言うのはそのくらい脚気に効くもので、横須賀に帰りトマトを食べましたらすぐに快復しました。

戦局はますます悪くなりました。乗務艦もなくなり、砲台建設の作業に従事しました。私も百姓のせがれのため割合手際よく作業ができ、上司からも部下からも信頼されました。そのうち第八期高等科測的術練習生を命ぜられ、試験なしで再び館山へ行きました。

普通科の時と兵器は全く変わり、今度は電波兵器を習得することになり、藤沢の電測学校に行くことになりました。実習は茅ヶ崎の海岸で訓練を受けました。

電波兵器は頭に入りやすく、米軍はすでに実戦で使いこなしているのに我々にはこんな有様では勝てないと思いました。

連合艦隊栗田艦隊はボルネオのブルネイ給油のため集結、レイテ島に突入して「艦隊決戦」をする計画でした。この当時母艦こそ多くを失いましたが、主体の艦隊（戦艦「比叻」「霧島」はソロモンで沈没）はほとんど健在で「大和」「武蔵」を中心に十月二十二日ブルネイを出港しました。

一方、機動部隊は小沢中将指揮のもと西村部隊と三方面よりレイテ島突入を図る計画でした。ところが待ち構えていた米潜に最優秀を誇った四戦隊クラス「高雄」「愛宕」「摩耶」「鳥海」の重巡が次々と沈没、次には世界に誇った「武蔵」に何百機という雷撃機の六次に亘った攻撃を受け、三十発もの魚雷で遂に最期を遂げました。二四〇〇人中一〇三九人が戦死、小沢機動部隊も「千代田」「千歳」「瑞鳳」が、そして今次大戦一番活躍した「瑞鶴」も最期を遂げました。これで機動部隊は全滅。栗田艦隊はレイテ突入をあきらめ

「謎の反転」という言葉が残りました。ここで艦隊の七割ぐらいを失い大敗北しました。

天下分け目の大決戦の比島地区は、陸上兵力も六〇万を投入、約五〇万人の戦死者を出し完敗しました。比島戦で戦争終結すべきだったと今となっては思えます。

我々学校教育部隊も食糧も無く、兵器の差もますます大きくなりました。しかし当時としては我々に戦況発表はなく、沈没して生き残った者の話から大方知ることとは出来ましたが、必勝の信念に燃え混乱することにはなかつたのです。練習生の課程中、電波兵器の修得は程遠いものでした。

本土防衛のため大磯の坂田山に相模湾上陸の敵を撃つため、戦艦「長門」の副砲一五・五センチを据え付けるための作業員を命ぜられ、平塚に出張中の昭和二十年七月十七日の平塚夜間空襲で百二十機の敵B29の大空襲に遭遇しました。陸軍の兵士と共に鎮火につとめようと思ったのですが到底かなわぬことで、駅の近くの防空壕に入りました。そこに焼夷弾と爆弾が直

撃、全員大負傷や出血のため、「ここをしぼってくれ」と言いながら次々と死んでゆきます。私も人を助けたが自身も重傷で戸塚海軍病院送りとなりました。弾の摘出に麻酔もろくにせず痛い何のの話ではなかったのです。まだ三個ほど弾が背中に残っています。負傷者が次々と入ってくるため十日ほどで快癒、退院しました。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送を海兵団の庭で何方という兵員が集合して聞きました。その放送はあまりはつきり聞きとれませんでした。「負けた」ということは聞き取れ、部屋に帰って大声をあげて泣きました。喜んだような下士官もいましたが大方は大泣きしていました。大部隊のことで多少の混乱もあったのですが、八月下旬復員しました。皇国護持のためと「秘密図書」を持ち帰りました。

我が家も長兄は満州奉天で戦病死し、次兄は近衛野砲隊でシンガポール攻撃後印度洋アンダマン群島へと参戦し、昭和二十一年復員しました。家督を次兄が継ぎ、私は分家して織物卸業を営み現在に至っています。

す。

思えばあの東大東亜戦争において幾百万の人命が失われ、水漬く屍、草むす屍と散華された人々のご冥福を祈ります。願わくば二度と戦争のない平和日本、世界平和を祈念します。

## 海軍従軍記

### 九死に一生を得ること二一回

山形県 矢萩 信一

私は、大正十年六月三十日、山形県天童市で生まれました。昭和十七年一月十日、舞鶴海兵団に入りました。入団当時の私の家庭は、農業で果樹園（ブドウ、モモ、サクランボ）を営んでおり、両親・長兄・次兄・姉・私・弟・妹という家族構成で、生計はまあまあ普通でした。私が兵役のため、海軍へ入隊しても大した経済的打撃はない状態で、私も後顧の憂いなく、勇躍日本男児の本懐と家郷を後にしたことでした。